

資料 「五木庵五木俳行脚日記」

田 中 道 雄

ここに翻刻するのは、天保期の行脚俳人、五木庵五木（天明七^{一七九七}—嘉永元^{一八二四}）の旅日記の全文である。宮崎県延岡市島津正夫氏蔵の『五木行脚手控』（写本一冊）に収まるが、一群の同家資料および五木の閲歴については、拙稿「五木庵五木・潮水父子の俳諧資料」（『佐賀大学文学論集』9収）に紹介した。書誌的事項等は同稿を御参照いただきたい。

いうまでもなく行脚俳諧師は、俳諧の地方への伝達者、俳諧興行の媒体的存在として、俳諧伝播史上に主要な役割りを担うが、その活動実態の解明は必ずしも充分ではない。本資料は、俳諧がもっとも普及した幕末の時点において、彼等みずから手に成った生の記録として貴重と思われる。もっともその内容は、時に俳文体を模しつつも紀行文芸を意図したのではなく、あくまでも職業的な「手控」の一部なのであり、そしてその煩瑣な事実の記載がかえって、彼等の生活を追究する我々に益するのである。とはいえ、決して無味乾燥にのみ止まるものではない。随所に現れる彼等の意識や心情、風俗・食品等へ示す関心は我々の興味も多分にそそり、読み行くにつれ、野辺を急ぐ彼等の姿をも髣髴としうるはずである。さて、ここに見る十二回の旅は、いずれも日向延岡を起点としながら、その規模においては大小様々であった。わずか旬日のものから二年に及ぶものまであるが、大別すれば、(1)西国各地を回って大坂へ向かうその一・その二（未完結だが、同行の息勘助の日記で補える）(2)周辺の豊後日向各地を回るその二・九・その一、(3)直接江戸へ上るその一〇、の三種に分ちえよう。そしてこのような三通りの旅それぞれの実績をもとに、地方俳諧師五木は後に大坂へ移住し、やがて中央の宗匠に納まるのである。地方業俳の中央進出、またそれに先立つ旅の主目標に二都が含まれるのは、いかにも天保期らしい俳壇現象と思われ、この日記の特色もまた、地方でのきめこまかな行脚と中央での広範囲な俳文という、異なる二つの位相を見出す点に認められるのである。

ところでこの旅日記は、一七〇丁余の大冊である『手控』のうち、わずか一五面を占めるにすぎないが、細字で克明に記入されているためか、実量はかなりものとなる。したがってその文体や記載形式も決して一様ではない。例えば、その二以下は後に転記補入されたものらしく、錯簡や日付の錯誤さえ認められる。しかし今はその細部の指摘は略し、錯簡を正して年代順に配列するに止め、原本中の位置を表示するに、仮にA面とO面の符号をもってした。翻刻に際しては、句読点を施し、適宜改行したほかは、ほぼ原本に従った。（ ）内は原本の註記、〔 〕内は校訂者のそれ、□は判読困難箇所を示すものである。最後に、本資料を御提供くださった島津正夫氏御夫妻に感謝申しあげたい。

〈その一〉

天保三辰四月廿三日発杖、細嶋幡子え着。夕七ツ頃より哥仙初る。但此日富高月を胡障故也。細嶋にて里十二合、明日の約してわかる。廿四日新町宿につく。キノ国や久米殿。廿七日津野崎え来ル。何れも差支ニ付ハタゴニテトマリ、廿八日クリ〔ワクカ〕チ文水エ来ル。正明寺ニトマル。浄土寺。外、高鍋御ボタイ所、善宗大寺、此住寺に付合。句初心也。此夜爰ニ開卷有り。廿九日ヒキ参詣、御寺ニ居内雨降タス。今夜爰トマリナルヘシ。蚊口二里。

五月一日ツマ眺鳥ニ来ル。此日サイマン参詣。於坊哥仙初る。此所にて鯉角眺鳥三吟、尤眺鳥ト両吟二卷、別ニ鯉角ト両吟一卷、メ三卷。五月四日、嶋内え行。松州子と鯉角二卷三吟、又六日嶋内にて三吟式卷、メ四卷、双方メ哥仙七卷出来ル。同月八日夕より本城習之ニ来ル。又哥二卷仕かゝる。されといそく故少々ニ而引切つもあり也。尤爰にても指合の哥仙うつし遣候。其歌仙二卷半哥にて止。同十二日昼より高岡え行。爰にて別ニ句帳を捲る。表題松葉搔。十二日巳ノ刻高岡に着。楓扨ノ許に伝書を持行処、先爰に居よとある。然ル処一艸子は一昨日其内の嫁死去に付、今日さふ、^卯、^礼との事、残念ニ思えともせんかたなく、先伝書并ニ追悼のたんさくを遣しける。

前書略

よしなしや頼む木陰もさみたる、
本庄より此所一里、爰はさつま領也。此道にはし有。広き川ニ小さき橋也。

涼しさやさてもあふなきひとつはし

山あり時鳥啼に、

汗いるゝ迄そ山路のほとゝきす
橋に渡りちんをとるに、

夏艸やこほれて知れぬ渡し鏡
ほとゝきす啼やいつ迄咲あさみ

十三日一艸子忌中故かへり、楓扨と両吟初る。又外も老人見へ酒宴。同日月知梅一見、友もなくほくゝとして行けるに、此寺二人さへなく、名梅は今や青梅の時を得、さも大庭ニ所せく迄はびこり、只小山の如くそ見えたり。

梅の実の落る音きく茂り哉

青梅を見てても潤ふ咽かな
梅青き庭や夜の間に伸る艸
青梅や花より寒き雨の月

五月十四日発足、連有て舟より登る。△鹿兒嶋の人、名ハ先ニ出す。〔以上N面〕
乗て居る舟に吹けり青嵐
未ノ刻去川御番所邊ニ付り。舟ちん七十式文、川三里、是より高城五里、外老医老人、名如流七十一歳。十四日夕野崎平助宅一宿名蝶子。十六日立。連衆アレとも会なし。宿銭貳百文出し留る。

夕暮は秋よりさひし竹落葉

十六日、道中ニ而、けふより入梅歟、葵咲しと聞に、

咲初てからけたいなきき葵かな

十六日七ツ時福山ニ着。都の城より此所福山（道連有て此所ニ着）六里。船宿立山甚吉宅。

浪の上に枕して居てすゝし鳥

爰らは御城下を放るゝ事十里、山浦里のいとゝに鄙ふりたるに、女のはなしなんと更に聞分たたく、さすがに西国の果とも思われ侍れは（此家に売餅有、七ツ呑）、

言事の浪に紛れて青嵐

売飯も浪打際の塩はゆき

十七日鹿兒嶋町、宿問屋深江伝右衛門全跡ニ昼過付。同日所々尋、ちくぜん友、四郎兵衛こと慶之ニ行、哥仙初る。此日前夜より大雨。十八日朝早上ミ町琴州ニ行。廿日琴州子本家え一宿。

今夜から關に名の有ほとゝきす ^{サツ} 琴州

廿三日風阿にわかれ、只冬子同々ニて三里程南の村俳人方へ行。其人胡障ニて其日帰り、蘭之へ一宿。其日観音詣。

思ふ事滝の清水に付て行

□涼し風は吹ても吹いても

撫て見んやかて咲へき石の苔

桜嶋句 影吹や葉さくら嶋の青嵐

俊寛か池 涙ほと水か残れはなく蛙

五月廿七日西田町へ行。但馬回子。五月廿九日鹿兒嶋出立。カコシマ手形ちん五

百文、宿チン高直、同夕いちく問や伯〔以下すべて泊に改む〕。

〔六月〕一日センダイ内東郷町問屋ニ付。但斗秋方へ来ル。是ハ大家ナリ〔約一〇字抹消〕三日滞留。四日滝のゆだ湯元泊り。東郷より三里、此日道大迷。けふは阿久根迄八里なればさのミ勞する事もなしと、朝四ツ前とをもふ頃より立出けるに、暫く歩みて長き谷を過ければもはや日中と見へける。谷の奥にて百姓家有けるに立寄、昼飯つかへは念頃にもてなしける。爰を立出れるニふと道に迷ひ、限りなき山々をあちこちとする内道たへて、夏艸生茂り土茯苓青蓋にて足を切さき血なかれ不止、且こけ且まるひて只足の向かたへ行ほとに、漸人ある谷え辛ふして下り付、尋けるに、当もなき方へ指さしければ、あきれながら、西の方を向てたとりけるに、日のほつする頃温泉の谷え出たり。此所滝の湯だと云相応の湯壺なれと、春秋と違入湯の人も少く、扱宿を求めんとすれとも独り旅をあやしミかず人なし。誠をつくし漸かり出し五郎四郎など喰て入湯す。ハタコ式百文。扱今朝より山野かけ歩、道凡八九里、然ルに東郷の町より湯田迄道のりわつか三里也。誠にあきれたる次第なり。翌日八ツ時折田甚兵衛殿へ着。道五里、問屋先ハタゴ、今日昼より雨天。〔以上A面〕右の迷道〔以下数字分裁断〕

海向て一息つきぬ茂り山

たとりつく家に人なし青芒

里近ふ我を導けほとゝきす

五日昼より雨。六日朝より風雨つよし。されともアクネを立て、泉問屋より改メヲ取て、番所え半道ほと手前、舟問屋えとまる(コメノツ)。此日雨風にて大難義なり。七日舟にて行。賃式メ三百、四ツ割。但し、田の浦当の処行越、又跡かへるつもり(依テ予一朱金にて済)也。舟着場ヒナグ、夕七ツ時着。爰にて乗合の衆にわかれ、田の浦へ三里程立戻。然ルニ暮ニ及谷水高く、夫レ故一里半行て出店ニトマリ、翌日寺へ行。△同舟の人、下ノ関西鍋町中の屋平助。七日雨間有、在家ニ泊ル。八日朝田の浦覚応寺泊り。去雁と云。哥会初ル。九日雨天。十日雨天。田の浦を立、二里程北ノ方在郷馬有、俳人なれハ尋しに、老母死ニ及ふ。依テ植柳ト云処ニ遠藤菴を尋しに、此所問屋多田宇治平柳亀と云アリ。初心ナリ。哥仙初。此所は熊サガラ様の御船倉カリヤト云、百軒余の処也。右植柳町の続也。三十扶持人也。此所ハツシロ川ノミナミ也。宜処。ヒナク六百軒程の所廻り、付句斗ニテ俳子ナシ。庄や其心ありと云ともハシタナレハ公ニ来す。

。追悼文句

多田柳亀英雅の尊父過給ひて凡百日といえる頃、此亭内に暫風交しけるに、亡父の追悼せよと有けるニ、時しも爰に茶蘭の鉢植青々として薫りふんくくとゑならぬ迄に蔵し、朝となく夕となく賞、歎して句を作り、御仏ニ手向侍りぬ。

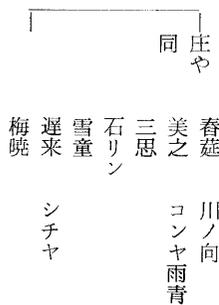
常香の茶蘭や風の薫り口

此辺の海に知らぬ火アリ。実説略ス。白嶋、石大小如雪。廿日出立。

柳亀送別 近付の雨を佗てや立水鶏

同日八ツ代池田宗宅え来ル。俳名無名、外ニハ社中ナシ。八代ハ植柳ヨリ川二ツ越て北也。道五七丁有。今日病用多く、其夜会十二三句出来ル。廿一日立出。同日小川岩崎新三郎春彦と云。廿二日滞足、カセン初。廿三日滞留。廿二日夜三人見へて夜半迄会スル。廿四日出立。先ツ熊本浄行寺ニ着。尤鹿兒嶋馬回より之添書ナリ。廿五日梅土と云人に行。南方の初心二人、ウスキ南漢来合ス。廿八日立。南方村え連衆アリ。二夜止り会出来ル。六〔正シクハ七〕月朔日少シ南中代村え来ル。此所社中多し。爰ハ大ツより一里ホトアリ。南方村社中、梅雪観水非水慶山、外ニも有。

中代村社中



六日中代村ヲ立テ、同下町村傘柳宿。外、四友、外、若雅アリ。九日朝下町村立テ陣内村え来。△山影風曉。同日大津一齋石羊ニ来。石羊他出、一齋大取込、一齋亭一宿、俳諧無。十日朝早く立、山下へ心さし立出る処、今問より村々にて雨乞のけいこ有之処、けふ一流に雨乞とて道すがら其賑い、筆紙に尽しかたし。右ニ付道々茶やなど何れも人斗にて心能休足さへ不出来、往来ハ〔以上B面〕群集にて通りなく人の中を押分く山が急行。宿の事聞合れとも此齋にて宿なし。

□山下真宗寺光専寺、大寺ヨマ寺也。此寺の新苑知熊本浄行寺にて知音、右ニ付立寄けるに此人もけふの雨乞故他出、爰にまつ事凡二時、日暮ければ此御寺へ宿ス。扱今日の雨乞ねり、流石大國ほと有、言語同断之見物ものなり。中に山がね

り作り物沢山、葉うりにて葉名即功龍王丸ト云。其外村々作り物をとり、さて賑々敷事なり。十一日早天ニ此寺を立、柳川西国や治兵衛殿方へ添状を携行けるに、此人死後にて若き俸後家女房居けるか、中々不都合にて取付かたく、右ニ付□〔間カ〕屋へトマル。ハタグ百四十文。十二日クルメエ行かんと思ひけれども、昨日十一里余之炎暑道中ニつかれ、且久留米へ知る人もなき間、柳川より沓里半北、榎の木佐多や政治、問や也、爰に來たり休足、柳川ニキヤハンを忘れ置たり。扱十日より十一日、肥後内雨乞のねりにて、往來事の外興有る事なり。

十三日榎津を立、福嶋へ行。五里東の方。然る処福嶋イモン留主を遣い出合す。尤外宿とりたれとも出合さる故、夫よりクル米ニ行。十三日の事故問屋へ着。爰ニかじ屋町杜有、通り町三丁目人形や小右衛門米如アリ。十四日他町桶や慶五。クルメ宿三本泰松や清助。十五日高嶋へ行。城下より三里東の方。此道ニ北野天神と云有。大社也。此天神こそ京都より以前の神にて根元なりと云。高嶋和戎車月、爰一宿。十六日高嶋より五六丁脇村馬子宿立梧一宿。哥二卷。十八日三里來り一宿、ミナギ石岱。十九日秋月ニ來ル(但ミナキヨリ二里北、五万石)。宿大医ナリ。ハン中、秋月加峯凄然、此所ニ五六輩有。会出來ル。廿二日筑ハカタニ來。松二、此日会日故同々ニて行。廿三日土馮子ニ行。兩吟初。廿四日ヲシ町大野瓢風跡角二子許、同夕箱崎參詣。ハカタ宿、サウタン町藤や九助士エン、葉院はるの町川越又右衛門。廿二日より廿六日出立。和田村庄や周平殿、今ハ市郎衛門泥花(鶴カ)、二夜居。廿八日上スエ源七殿へ宿ス。廿九日スエヲ立、田代村コガ村庄や元梅調、庵号ハ曙庵。スエより八里程、肥内ツシマ料ナリ。此所ニ廿九日より八月四日迄居。眼いたミ止す。四日爰ヲ立テ、甘木四日町金陵宿。哥仙兩吟。外ニ初心有。六日十斗來て、荻原寺小屋有梅一宿、哥仙初ル。七日日田隈町、宿中町虎や政平。八日豆田え風家歩行。秋風庵初メ十一庵、其夜御陣やへ行。一樵子事九六種々振舞有。但し菓子持參、御養父深節之人。九日於クマニ歌仙初。隈町五嶺佐藤三十郎、△文鷲日隈彦助、△黙亭京屋四郎兵衛、△豆田連長春庵桃秋。十三日同所豆田へ行。五岳町とし寄也。物持也。爰も一向哥仙連少く、句人は幾らも有よし。五岳子も親類大病故、事の外取込なれ、九六庵にたいしてせわやくと見ゆ。さるほとに十四日ハ放生会夜宮とて町中大驚の折から、十三日夜頼ミ切たる五岳子、聲急死ニ付、風雅所にて無之、右ニ付大節なる待賢なれともべん／＼と居られす、昼より出立。熊町へいとま乞〔以下数字分裁断〕〔以上C面〕

錢別もせず〔以下約一行裁断〕よし井と云町、チクコ料也。遅日庵一宿。年八十五、是もいたミ故何事も出來ず。名月夜、クルメ城下ニ來ル。風人なく困りけるに、トユウと云老俳一宿、月の句など云。十六日出立。△八月初めつたの事也。筑後料之内一庄や掛リ二万石之所、大庄や一ヶ所小庄や廿四ヶ所の所、小庄や十八ヶ所大庄や一ヶ所持丸六ヶ所メ廿五ヶ所、百性一キして打崩したる也。誠に大さわきナリ。時二百性ハ無事にて、右頭大庄や入ラウノ由。

十六日クルメより立、舟使ニテ長崎渡り聞合処、柳川より有之段、右ニ付柳川へ行。クルメヨリ五里。柳川へ舟ナク嵯峨へ出、又三里余。今日の道九里余、大キ草臥。サガ舟、□而ニ夜に入テ來ル。イサハヤ渡り其夜有。夜四ツ半、一人前四百五十文、外ニ宿チン百文。其夜中舟走り夜明テイサハヤ着。汐待、かれ是五ツ半二道中、此所にも舟ヤドアリテ百文ナレトモ舟宿に付す長サキエ行。イサハヤより長崎七里、夕七ツ時着。宿、中紺ヤ町浦田文治右衛門殿。此宿ハヒタ長谷部氏之書状ニて此家へ來ル。夕、酒肴三シ、飯一汁三サイ。△長サキニ渡るに丸木舟ト云アリ。是ハ三人乗にて一メ八百文、一人六百文割。且此宿ハヒタノ御用達ナリ。今日ヒタヨリ御アシカル來タル。其人ト同座ナリ。十八日、馬町中川義右衛門其英、カミヤ町浦田、寄合町俗雲但シ茶、十人町館良平、此分尋ル。廿日俗雲書樓会初。カゴ町乙名、延岡用達田口源五郎。廿一日日本古川町肴やニ越。但風阿と同居極メ。当時祭前にて町中大取込故、風交出來兼、且滯足之処もむつかしかりしに、中ニ添書先の両子吞込にて祭過迄滯留ニ相極る。右ニ付哥仙も不景氣ナリ。九月二日ハ人数揃と云て神事町但し七十二之内幕打廻し、家々色々の毛せんなど敷はへ、たて物等善美を尽す。筑山庭鏡分不相応に表をはる事目さましき事限りなし。扱々々ニ此日朝より晚迄大客入替り／＼振舞之次第略ス。予も風阿同々にて二軒つとめたり。此日より十一日迄祭礼、しかし九日か誠の祭日也。四日何心なく帰りけるに二階さわかく、上り見れハ毛唐人とも風阿娘交りに酒宴最中也。予も下戸なれと交りの面白ければ大分ニ興ニ入、酔を過しける内さま／＼の興多けれと略ス。扱唐人來居る事凡六百人、赤毛凡二百人、此辺りより唐人屋鋪迄ハ唐人の往來和人よりも多く、知りつゝも日本とも覺へ侍らす。宿元ニ折々唐人來たり酒宴事和人のことし。興多き事尽かたし。九日より十二日迄浜出。スワ祭礼中々筆に尽かたし。又角力來ル。緋をどし閑にて大寄なり。毎日哥仙兩吟あり。十八日十九日兩日惣会、哥仙二卷出來。廿日赤毛出船二艘。一艘ニ而石火矢

数十丁、山々響大如雷。當時行脚四人、風阿フエ松マツニヨニ山月サンゲツ予。〔以上D面〕十八日家崩し有。折々此側アルヨシ。△スワ神事能有延引。廿二日毎月天神講、歌仙一順ほつく一句奉納、振舞大ニよし。廿三日四日留られ、廿五日大村へ行。長崎より五里山村、道よき往來也。いきりキと云ふ場に着。是より大村沓里半、入う渡し。ハツ半大村へ着。此所風人ハミナ士衆ナリ。依旅人門ニ入事不叶、漸町宿トル。本町ノハト舟木や、亭主死て後家也。其夜廿五日雪満亭招かれ酒宴、哥仙初。明廿六日殿御出府に付諸士かた大繁多、此体なればさしたる事不可有。悠々子ハ當時繁多の上病氣、誠に折悪し。つくつく案しけるニ此儘立候事志残念と心をつくし候処、廿八日ニ会可有由、廿七日悠々子より迎來りて片町酒や渡部茂右衛門方ニ來ル。尤此所ニ二夜とまるべきよし。此日午中刻斗ニ風家の使來り、去寺の隱宅ニ私ヲ引行しに留主、守人さへなく使の者もあちこちと世話やきけれとも雪まる子さへ行衛知す。予少し風邪の頭通なれと氣なかく待けるニ、日西山に及へとも人の音信さへなければ不得止事帰る時、

人まつや秋行庭の冷る迄

廿八日朝から待待れ共沙汰なし。漸暮前ニ彼悠々見へられ、とても哥仙して不出來由いゝの咄しなとしてわかれける。雪満役物頭、悠々役若殿御側、殿様式万七千石大村丹後守。悠々子ハ上手也。哥仙の出来は残念也。此所俳諧は不出来と言とも馳走甚たよし。廿九日立てイサハヤへ添書を持、老雅尋候所子細有て此人家ニ放れ親類の方ニ居られけれハ、自分ハタコニテトマル。翌朝聞ハ風家外ニ段々有しを不知残念。尤此所けふハ祭とて中々とめ候事ハなし。卅日立て神代ニ來ル。歌仙少々出來ル。此所ニ雪丸居合、両吟スル。尤よき人物ト見へたり。

十月四日伝書を遣、三ツの沢へ來ル。二里半、此所大庄やなるか子細有て開門也。尋けれハ飯など振舞、深江庄や元ニすむ。此所ニり余りと云故來かゝりけるに四り近く有けるよし。漸くミクニ着けるに如才なくもてなしける。此内所々ニ風家あれとも、皆さしつかへ故爰に來ル也。誠ニくたひれたり。爰も大庄やと見へたり。尤隱宅ナリ。

ウンゼンのありさまを予昔深く感せし事有。今度此山の辺りを通り見るニ、誠ニすさまじき事云斗なし。海庭すへて泉水にひとしく、真ニ筆に尽かたし。十二日翁の日、肥嶋原深江興行、

夢探る日に時雨けり朝の内

十四日深江より舟にて八里北の方山田庄舎ニ來ル。尤只平子梅子々々也。此日

彼崩立山の前を舟にて通りけるか、北風寒く暮切て着。此日難義。崩山ハウンセンならず前山と云山也。凡四十年以前の事なるよし。

水寒し崩れ残し山の影

十八日出立と定めし処、雪丸來りかれ是又延引。此家馳走善美を尽す。〔以下數字分裁断〕〔以上E面〕廿日山田より三人同々にてたいら初ハツニ宿。廿一日兩人ハ急て先ニ立。同日三ツの沢庄舎ニ來ル。タイラより二里。此日雨天。廿一日三ツの沢、素風宿。爰内證胡障故長滞留出來す。其日歌仙初。廿二日歌ニ表して出立。同日タイラ田嶋白春。此所病人多く、二三丁行て田中半兵衛邦彦舎ニ一宿。爰も風邪にて風交なし。廿三日タイラ脇ヒゲクろ禹水ヲ訪、風邪ナレトモ暫此家風交有。此所ニ而柳川渡聞合處、明日海上六里余行て柳川道有。尤爰より柳川迄十七八里有。雪丸ハ五里脇の村へ行。尤名チ、ワト云。此所へハ能連四五輩有よし。廿三日禹水一宿。廿四日早天ヒケクろ浜手へ行。相談致候大キに間違、無拠城下迄出。三里。然ル処城下も柳川なくなり、致方なくヒゴ高橋渡ニ相定。海上七里、チン三百文なり。此所ニ肥後の浄教寺町の人來合、同船ス。然ル処風悪く出舟いとも分兼る。先二度深江ニ行、寺ニ一宿。廿五日日和能出船、ナガスエ着。長スより二里來てミケのスワと云所ニ泊る。廿六日柳川新町ヒゴヤ仁右衛門、問屋也、此家にとまる。雨天。スワより此所五里半といえとも六里余アルヨシ。尤二度來ル。

十一月八日柳川を立て三度クルメを過、高嶋和戎方へ參る。此間父死去、十日斗ニなる由、されと二歌仙初る。追悼ほつく前支略、

冬枯や焚かは薫らむ枝はかり

十三日高嶋を立、甘木秋月を打通り、小竹立砂ニ來ル。此道十里、日入て着。大義。爰に少ケイ來合す。双方歌仙初る。十五日立砂故障ニ付、三四日が間飯塚へ來る。是ハ小竹より沓里七合跡辰り也。飯塚藻真、初心ナリ。十九日イ、ツカ樽や孫七殿を立て幸袋ニ來ル。同日幸袋ヨリ小竹六砂へ二度來ル。廿三日小竹を立て、こくら木せんば町印判や木亭と云小家に一宿。歌少々。何れも不風流の土地と見へたり。十四日出立。是より大イ里浦、沓里半行て渡し。下の関渡しも一里半と云。廿三日たいりえ出候處、けふも雨天にて舟出す。先舟宿に着。此亭主心あり、外ニも又有。廿四日夜隣家ニ亀蓬と云所宗匠有。両吟二巻初。其夜次の夜、門弟衆四五人賑々敷事也。廿八日滯足。廿九日出立。同日舟木泊り、ハタゴヤ。卅日六里東、周防内小郡宿。此所ニ二夜トマリ歌仙スル。

三夜トマル

〔閏十一月〕三日より小郡より十丁斗東在郷寺巖六ニ来り、兩吟二卷。外、初心一人有、又二折終。猶東の方大里、是も寺也。北厓、ヒシ寺也。兩吟初る。尤五日朝来ル。七日夜十丁斗出て阿ナク一宿。此所迄北厓来り、三吟少しスル。八日朝立、山口へ来ル。此所漸風交多し。アナク方より此所凡四里半。八日より風交、此所二而歌仙等沢山。

廿日遅立スル。此日山口を立。四り来り、天神宮參詣、此所宮市と云大社ナリ。サイフ天神ニ并ト云ナリ。ソレより四り来り、トンタと云所ニ一宿。廿一日トンダを立、高盛へ一宿。此所能シユクナリ。トンダより九り。小郡より山口にて廿二三歌仙出来。廿二日高盛を立、岩国〔以上下面〕ソロハン橋一見ト新ミなどへ出。此所広嶋渡り舟場也。高盛より六里、昼八ツ過ニ着。其内舟宿取。夜四ツ時出船、此船宿にて大分そんスル。舟中五里来たり宮嶋、宮夜分なれハ遙拜し、朝六ツ過広嶋より一里手前ニ着。それより上り添書玄□□許、此人老盲、雪頂へ送る。此人甚た交よし。されとも折悪く今日より旅人堅停主、一宿の外成かたきよし、誠にあきれ切たる次第也。爰に因州行脚居。是も明日より追立らる、由、誠此節の難義言斗なし。然ルに滯足相成ずとの事、困り切たる次第也。されと予ちと斗事安し出し、一兩日ハ滯足と見へたり。今夜雪頂兩吟。

廿三日朝広嶋ニ着。廿四日夜舟ニ乗。廿六日朝伊よ三ツの浜ニ来ル。三ツの浜ニ四五ヶ所添書有之候へ共、此処一向交不宣、尤るすとして不取合故、同夕城下え出。所若宗匠猿州と云人を尋しに、此人殊の外風家にて、先此庵ニ杖をとむ。廿六日夜四五輩来り、大ニ酒宴初り鶏明迄興しける。廿七日庵主兩吟。扱此四五日不景氣にてありしニ、爰らより流行する事限りなし。誠に世の中の広き事を知らば、一たんの鬱に因事なかれと自云。此所にて歌四五巻して、

十二月朔日道後温泉の本に泊る。此宿俳諧もせずに行脚をとめる人なり。名ハ米や金石衛門。二日立て是より四里、川上と云所へ行。此所の酒や風人に添書、何れとも不交。右ニ付三四丁北の方庄や二宿。名ハ句集に出す。三日大雪後にて山越迂る事限りなし。此間の大雪少しも消す、只通り筋斗凍て両側五六寸雪有。爰より一里斗行と桜三里の海有。尤三里といへとも桜の有所は一里余、皆古木の大き西条へ夜に入て来。九里也。然ルに此所雪丸より之添書にてかけや何某、当時大借銀にていつれ当暮分散と言位なれハ、一宿して三里半東の方田のうへ奇丈、大庄や弟也、爰に来たり、先うさを忘るる。六日銅山の口タツ川と云所へ山かけ

子を尋しに、此人今ハ新浜の役所へ居る由、右ニ付又々西の方新浜へ出、役所へ行候処、茶乙居られ、三吟ニ而一夜歌仙二折する。

翌日七日又々タツ川へ行。山陰の住居に一宿して翌日銅山へ掛る処、麓より三里、大体半頃迄ハさのミ雪もなく、尤滑たりと見てハ心静に長持と云者に打交りて登る。長持とハ銅山へ米を運ぶ人部と見へたり。日々百人斗も登山之由、扱々大造の銅山なり。于時山半ハ頃より雪多く、□〔次カ〕第〳に深雪にて、道作りの者、幾山ともなく〔以下二三字分裁断〕〔以上G面〕〔約一〇字分裁断〕□□さへ付す。山八歩目などに大きな茶屋有、番所有、爰より勘場迄十六丁、此所より上ハ坂も急に木かやも一向見へす、只真白き斗にて、道作りとももよふ〳雪に踏とめをつくりける分也。中々筆紙に尽かたし。扱勘場体之所ハさらなり、ちいさい家ハ屋根斗雪の中に少しかた有、大家の分も大かたに埋もれ、戸口などハやつと潜る位明てあり、中々物凄き体、言はかりなし。内に入て見れハ惣体くらく、早東柴人子に面会して、先風呂に入て少し人心知付。後奥へ入れハさすかに風流の体、且小便をせんといえハそこ明てと聞けるに、明て見れハこわいかに軒とひとしき雪をちと斗切かぎ、爰より小便するなど扱々面白きありさま也。是ハ十二月八日也。然ルに又々吹雪して九日夜より十日夜迄大風、此山賽大家ナレとも、低ミの家なれハ雪益〔々々〕吹寄て、座敷など軒迄雪つみて、中々物凄き迄に覚ける。

雪掘て横窓透す山家かな
十二月八日より同十二日下山、昼過より麓立川柴人亭ニ一宿。十三日四里上ノ方天満村、寺尾興輔梅窓子一宿。十四日再田の上奇丈子方へ来ル。爰、年宿也。十五日節分、今夜豆打有。子共五十人程家内ニ来、賑々敷事とも也。

豆打や寒いめしらぬ子等か声

廿三日中雪。廿六日夜餅搗。廿七日大雪。廿四日天満村と云所より壹万五千句集評来ル。道二里斗有。同日近村表天皇奉納来ル。五千句奉納追加、

神に申御慶は別に有にけり

〔天保四年〕元日晴天。二日朝雪大降四ツより雨となる。五日晴天。六日雨。四日より会初。七日夕より雪。八日天満へ行。寺ルス、梅窓居。添書持、土井村多賀雄行故障、右ニ付廿丁斗東、燕二子許一宿。病氣ニ而無俳。九日舟木大庄やへ来ル。宿ニ一宿、探題スル。十日新はまより田の上に戻ル。然ル処、柏と云所よりちらしを配り来たる由、爰より七里有。尤五木評也。天満村一万五千集追加。寺也。

朝木魚をれか打なら花いさめ

改真言宗故、

東風ふくや見えた通りの能御雨

正月十六日郷村を尋、新はまへ廻り、西条卯角へ来ル。十八日柏村ニ来。西条より此所九里、夜着。庄や殿方、其外三子来ル。十九日信言寺ニ行。廿二日迄居。半歌仙シテ、廿三日郷村庄や元来、三子歌仙初ル。廿八日田の上宿。廿九日三度燕二間。雨中、同日添書持、十五丁程東、常村素柳一宿。〔以上百面〕
二月一日常郷を立て和田浜、今は宿。二日観音寺町、マンテウヤ宿。三日葉や百泉宿、酒や也。茂水両吟初。茂水宿、藤田や車外、是も酒や也。四日仁尾宗徳来ル。丸カメ料、塩田又右衛門、四日ある〔人脱カ〕の初老賀、
四十雀杖をくれたら踊へし

又六十賀一秀と云ニ寄て、

〔句脱カ〕

観音寺町百泉へ廻文百員を三巻捲たり。又廻文の歌百首捲たり。六日仁尾を立て、三嶋新や春雄一宿。七下柏庄屋元来。下柏宿伊八殿。八日より十五日マテ居。十五日乞はれて又先の寺へ行。十七日下柏ヲ立て常村、先の家に来ル。十九日同所三福寺興行、常村油や小舟、庄や也。町筋同村酒や素柳、此所に乞はれて滞足。酒や隣旅宿やえ着。廿五日卯角小林ヨリ招、湖秀子同々ニ而滝見に行。其夜庵ニ而酒宴、夜半帰る。

三月三日立、又舟木泊り。四日八田の上より新ハマ西条来、泊ル。五日ヒミに行、又西条ニ帰ル。風雨難義、卯角子両吟初る。卯角家を取込故、又東へ帰り、其道中豊耕老人許、留主故、新浜山影両吟二巻各半歌仙、二宿して、八日再銅山ニ登。道ニて梅窓行脚ニ逢。因州者也。銅山別宿ニ着ク。柴人父追悼、前文略、
焼香は人の上でも霞けり

三月八日再銅山ニ登し処、折あし銅山改旁事多く漸少し斗して十三日下山、新浜へ行。上嶋山しやみせんやへ泊り〔風家ナリ〕、十四日妙口里耕子宿、歌仙初ル。但し西条より西ノ方一里半。十五日妙口立、中村桃人子へ立寄昼飯、返リニ可寄ト、同日又二里西北ノ方、桜井油や出店綿やえ来、宿や泊。此地、能所也。十六日雨天トメラレ滞足。十七日五里ホト西、菊間ハタコヤ泊。此日添書も持、二三ヶ所尋、又十八日も七里か間二三ヶ所も尋タレ共、不風流也。十八日又泰山城下猿州へ来ル。十九日築丸ニ□□□はたごや泊り。廿日又々築丸胡障故、又猿州へ行。二度三浜へ行しに、役人通にて大取込之体故、猿州へ帰り、其儘南西の

方郡中なだ町風家へ着。ハタゴヤ泊マリ。松山より此所三里、けふは昼より五里余り歩行、草臥たり。廿一日上なだと云所風家泊り〔其師匠等と云入。郡中より二里程有。廿二日所々風家へ寄。同日大洲城下へ着。其夜より歌仙初。四五輩有。ナダヨリ此所八里、大洲六万石ノ城下ナリ。廿五日立テ宇和嶋へ来。十万石御城下。爰ニ添書有とも、ハン中十里の道に来て口の苦故、外町ハタコヤ泊り、ナンギ也。廿六日木町四丁目亀や市兵衛市橋ニ来。両吟初之。河原西川氏緑苔ト云人ニ大ツより添書也。其夜亀や泊り。廿七日同町宿や、亀やより南、門より二軒目髪結兼宿や。能所也。

四月二日立ツヘキ処、大雨故滞留。四月三日宇和嶋を立て三里北東、尤帰り也、去ル町〔吉田也〕匠家蟻居を着。尤添書有。此所胡障故又三里来たり、うの町何某を問。尤在町也。是も他出、又十丁斗来りて久枝村大庄舎雪瓢え一宿、ルスナレト添書有故ニトメル。尤心有家内也。其夜早く尋跡ニ帰ル。明朝対面、無俳ナリ。四日添書ヲ持、八幡浜へ行。八幡浜酒やえ来ル処、其兄塩や善右衛門□引、更に同浜町ひらかなや権四郎殿、宿屋也、此宿ニ四夜泊り、発足の処留られて油や善吉梢雨ニ宿。但し九日ヨリ十二日三里大洲へ出。同所連中参宮等にて不人数故、一屋立て六里来て中山へ泊。此所ニ素文有、八十歳。今日ハ先日来る時所々ニ立寄、且約束も致置候処□□所、不思議違本通りなれハ一向此筋ハ無俳ナリ。誠ニ困り、しなのやト云ニ一宿。十三日川原町築丸着。他行、右之宿へ一宿。又十四日猿州ニ着。それより三ツの浜に行。他行多し。仍宿やに泊ル。此程足病、且風邪、難義。十五日猿州ニ〔行カ〕十七日〔一行近く裁断〕〔以上上面〕〔一行裁断カ〕同日桜井先ノ芦角子着。今日町谷へ寄た故、今はるハ不通に、爰に千崖居合、両吟半歌仙シテ二夜泊り、廿日立ツ。廿一日中村桃人亭宿。夜五六輩探題初ル。廿一日ホウ庄石魚胡障、西条卯角同断、右ニ付、夕方迄ニシンスガエ来ル。寺庄や他出、寄駕子一宿。廿二日燕二一宿。廿三日常村湖秀着。

五月一日常村を立、柏村え来ル。同七日柏村よりメントリへ行処、添書付故、かしぶん村仙禽子ニ来ル。二夜泊り、又メントリニ行所、ロトウ差支、センカタナク和田浦え来ニ、今は故障、又観音寺町へ来。爰も差支。九日ハタコヤ一宿。十日立テ大喜多ト云ニ行、差支。辻村へ行、差支。本の村へ行、差支。ハカタ村庄やへ行。夕方此処むつかしく大□在イ家宿。両日風雨、難義種々物語り有、略之。行脚初ての難義ナリ。十一日金ヒラエ来ル。三里余。金ヒラ差支故、其日丸亀へ出。又三里。此ヘン五十丁道ナリ。十二日丸亀泊ル。添書なく難義。翌日茂

椎に行。是も不実人ナリ。尤室渡添書をクレル。依此日乗船、然ル処風雨にて漸十五日夕方ムロ津船宿泊り。此程彼是ナクレナリ。舟中大退屈。

十六日又舟ニテバン州赤ホへ着。中村木屋新左衛門。尤城より南、川南也。此所ニ秘書預置。ムロより海上三里来て、スコシ又小一里来て城下ナリ。十六日七日滯足。十八日九日立テ沖の浜一宿。立テヒメジ善道寺一宿。廿一日立テ高砂泰、曾根の松、手枕の泰、石のほふてん参詣し、午下刻西二見え着。宿久左衛門、無俳。但ヒタヨリノ添書ナリ。廿一日也。廿二日雨天、昼より中尾小治左衛門干尋、両吟スル。二見より廿丁斗東ナリ。廿三日赤石添書先へ来れと差支、須磨へ添書ス。須磨もるす故兵庫に來り、雪丸か添書にて一宿し、廿四日夕八千坊着。此間の名所古跡不殘一見しけれど略ス。中尾より兵庫八里、兵庫より大坂十里、雨天、草臥。廿五日御屋敷松本へ毎度行。廿六日より八千両吟、外ニも初。五月四日升治ヲ尋、ルス。

六月五日、堺商家ヲトラ。糸屋へ泊、両吟初。糸や事黒多や成風、医者殿槽鷗、又青乙来合各初る。此所ニ五日居、帰る。十一日再升治を尋、則歸り、居所ハ箆や町塩町豊嶋や、且一丁北ノ筋同家隠宅。十三日天王寺少手前狐シヤウジ仏庵を尋、一宿。又黒かね橋ハリ儀ニ梅碩居ル節ニ尋。十四日より少々宛風交して、十九日大儀船乗船。但此折節、光勝寺様京より下りかけ同船。三幸丸、忠蔵舟頭也。十九日より廿四日迄キツ川に滯舟、此所蚊多く毎夜難義。廿四日夕より風直し出船。廿五日六日大風雨にて難義。廿七日漸追手を得、なを嶋を出。廿八日芸州大崎へ着。乗合ハ芸州三津村天満や藤四郎、弟同苗周作と云人也。八九
七月一日二日三日大崎を出、ミタライ泊り、四日五日六日七日イワウナダヲハナ廻る。七日シタナイ泊り、八日ヨノツ、九日サイキ城下シタ泊り、十日マルイチヒ、十一日入津。〔以上丁面①〕

△その二▽

天保五年十一月富高ニ行、十三日程居。〔以下丁面②〕

△その三▽

同明年〔天保六年〕二月廿五日出立ニテ、下日向行脚。其日月雄方二夜泊り、山下庄やえ二夜泊り、舟ニテ美々津へ下り、其日高鍋日光院泊り、翌日晦日宮崎御

役所へ着、一夜泊り、〔三月〕二日中村過て明之へ着。此所六日ニ立、内ウミ迄四り、翌ラビ城下へ着ク。病氣、大ニ困ル。暫ク滯留、後光照寺一甫宿ス。三月七日ヨリヲビ滯留也。四月八日飯酢を立て木崎ノ紺屋泊り。九日下北役所泊り。十日より本城習子両吟初ル。十六日二り来て都於郡トマリ、風人初心多し。十七日大雨。十八日ツマニ来、曉鳥ト共ニ嶋内松洲ニ来。十九日鳥かへり、予残ル。爰ニキヨタケ風牙居ル。廿二日曉う方へ来ル。廿六日立ツテ高鍋日光院ニ来ル。始終雨天也。廿七日廿八日立て美々津澄巴泊、廿九日山下へ行。五月朔日月雄来ル。故障故ニ同日尾末好山一宿、二日帰宅。〔以上丁面③〕

△その四▽

同年〔天保六年〕八月十六日ヨリ入湯、悴同々に立出る。八戸泊り。十七日梅内旗かへしの麓百姓家ニ泊。十八日竹田上町千艸や七右衛門福嶋泊ル。十九日滯足。廿日立て大銅泊り、廿一日浜の市、廿二日別府府内屋へ着。九月五日六里半来て泊ル。六日五里半余り竹田へ帰、先の間屋へ泊り、〔欄外註記…此ツギ三丁先ノ紙ニツ、ク〕〔以上丁面④〕勸助をかへし、独七日より双門庵に滯足。ヒセン養生して、十四日立て三里東緒方井ノ上村庄屋臣井ニ泊ル。但シ双門同々也。十五日臣井立て七里程東ヲチ谷泊り、ハタゴ也。十六日佐伯へ出、双門ハ孤雲へ行。予ハ木影の添書ニ付、柏江野ニ下、養吉を問行けるに、何ぞ斗らん、養吉と云ハ朝日館庄兵衛にてそ有ける。興多し。先此家へ泊ル。十八日立て廿丁斗、府坂市郎右衛門孤雲亭泊ル。十九日城下船頭町新屋孫右衛門如竹へ泊ル。龜年来ル。各両吟初ル。廿二日城下を立て柏江寺へ寄、釜魚ヲトイ、一宿。廿三日再府坂帰ル。廿七日□〔成カ〕水を送、柏江泊。廿八日鶴山黒人一宿。廿九日孤雲亭帰ル。十月七日出立、松葉一宿。十月八日帰宿。〔以上〇面①〕

△その五▽

天保七年サレ正月十二日新町梅賀庵興行。同廿七日昼より帰ル。亭君登り。〔以上〇面②〕

△その六▽

〔天保七年〕二月上旬梅賀出脚。三月下旬石高行、岩熊行、行騰行。〔以上〇面③〕

△その七

〔天保七年〕五月八日立富高留杖、但シテカケ。十八日山ゲ行、此所故障。一夜泊り、翌十九日立。小々雨天ニ付、舟なく陸通美々津へ出、其足にて高鍋日光院一宿。廿日雨天大雷なれともやかて日和なるへしと四ツ頃より立。終日雨天大雷止す。大難波にて佐土原へ出、郡司氏へ向ケ行所大難義。されとも急、八ツ頃ニ付。此段物かたり多し。生涯の難義也。廿一日滞足。廿二日未だ雨中なれとも立テ下モキタへ行。道三里半、昼前着。(欄外註記…全ク十九日より廿四日迄の雨天ナレとも、廿日より廿三日迄ハ稀代の大雨ナリ)廿五日漸晴天、城ヶ崎へ行、明之雨吟。廿八日清たけ行。廿九日下北ニ帰ル。晦日〔六月〕朔日。二日下北立、ホキタ眺鳥一宿。六月三日嶋内ヨリ川北野添村え、新名兼次郎梅島。六月三日四日。五日昼再嶋内え来ル。七日帰路、ナヌキ一軒や泊。八日帰庵。ナヌキより十一里半。(以上〇面④)

△その八

丁酉〔天保八年〕正月下モ行脚。妻町眺鳥雨吟。但十三日悴同々に富高一夜、鹿口一夜、高鍋に悴を置、ツマニ出ル。十七日より初ル。十九日野ゾへ兼次郎梅島雨吟二巻。廿一日梅島同々妻へ行。直クニ都於郡を過て本庄習之着。廿二日より初。外ニ初心兩人、風交出来ル。廿七日下午北ニ来ル。菓二方を与へ三夜泊り、二月朔日佐土原在大イダ着。郡司、野夫也。二夜泊、其内亀石梅水雨吟。二月三日福嶋、御茶や番也行年七十四才 其妻 同年各徒員〔コノアタリ約一五字抹消〕大風流ノ人物也。四日夕三人連眼科平松村君中へ遊ぶ。二夜泊。歌少々シテ立。高ナヘ日光院泊。二月六七日也。(欄外註記…三宅尚庵娘方□ノ東際米や治右衛門)〔以上〇面⑤〕

△その九

同年〔天保八年〕十月十九日立、月雄泊り。病中故一宿、明朝立テ高鍋日光院泊リ。雨天。〔天保八年〕十一月一日平松泊。廿一日福嶋二仙行。廿三日大イタエ行、直ニ宮崎下北へ着。廿五日城ヶ崎へ行。廿八日より下キタ。十一月六日立テ六日夕本庄着。天福衆を七日二間。八日より習之病氣。十二日立テ高鍋□亀ヲトヲテ一宿。十三日立テ佐土原ニ出、澄巴ニ逢て、直ニ眺う一宿。十四日野添梅島ニ泊ル。一宿。十五日十六日。十七日立、佐土原ニ出、清念寺宿。十七日十八日

十九日廿日廿一日廿二日。廿三日立。廿四日美々津藤米殿泊り。廿五日月雄亭、帰りハ極月十日頃也。(欄外註記…是迄三丁前の紙のつき也)〔以上〇面⑥〕

△その十

江戸行
乗合、江上頼平、
尾瀬九右衛門、
京野忠右衛門、
天保九戊三月五日山徳丸より上坂。四月八日安治〔川〕より八千房ニ着。但東海へ滞船にて十四日出帆也。川より病氣にて御たらいより快気、此所ニ上ル。又備前西大寺ニ上ル。扱大坂にて法体。八千ニ江戸一具舊居、フセン桜兄蘇山、伯州佳峯居合。后松人え泊ル。堀江柳平橋南詰西え入日向屋喜平也。四月十二日紀州路へ程十里来て、シントチエ宿ス。十三日紀若山御通町小田兵庫殿へ着。シントチより六里、昼時着。此日大坂より舞子等来り、興多し。其夜代官同々にて町宿トル。星カイ町一丁目魚グス。十四日三子四吟歌仙初。十五日和歌浦詣。曇天にて暫雨フル。

△紀州若山をしたい侍るハ、和歌の浦を見たき故也。時いたりて天保九の年夏初此地に杖を曳侍る。或日菊叢公に暇を乞へハ、僕を付参らすへしと有を辞して独立出、彼下り松など詠めて歩行。門山のいたゞきを見れば尊けなる社の有けるまゝ登りて拝し、是を東照宮の御社にてましますかと独神徳を仰。御山を下りしに善表を見れば、秋葉の社に紛なし。扱はと猶南をさして急げは、はるかに鉦鞞の音聞へ侍る。行て見れば神垣にて、鳥居に東照宮の御名明也。扱社頭の善美云もさら也。氏子等とおほしきか集り、かしかましきも皆神いさめのいさをしかハ、明後十七日ハ祭日とて三ツの御輿を鋸り立たり。朱ケの反橋を覗げは、弁天の宮涼しけにいまし給ふ。猶前つくに大湖有て、汀に赤き鳥居立けり。山の統に天満宮あり。こは筆とる者の詣へきにと、青石の檀マツを登り拜して彼湖を廻り過て玉津嶋にいたり見れハ、玉垣そこね宮居も古めかしく神さひ渺々と見へたるも昔忍はしく、さわいへ和歌の道斯やをとるえぬるかひとりと哀を催し、是より紀三井え罷けるに、遠流の渡し舟を招て名にしをふ塩浜、遠近人の行かふさま具拾ふ賤の子等か今やうの噂ふし飄つるゝも又をかし。急かぬ道も限りありて程なく紀三井に來れハ、山添の町賑々敷、若きおうなの客呼声、祖父はゝのよくほる体、いかさま世わたりに如才なかりしなり。仰キ見る紀三井寺ハ卯月曇りの雲中にぬき出たり。両側に乞食並居て往來の錢をむさぼる。石檀の急なる事他に越たり。始めて汗を絞り登りて見れば、若葉の風袖を返し肌へを冷す。頭を廻らせは□□

の祭日をもふけの□□、数百間か程に結廻しけんしうにかまへたり。はた青うみにつく、麦島、塩かまの有さま、今年宝年とて万戸賑やハさるハなし。諸民喜はさるはなし。猶見るに間に限りなけれハ、ついに杖を取あけはへりぬ。

秋葉社 御火ふせの御受露けき若葉哉

東照宮 かやくや若葉曇りもせぬやしろ

紀三井 早乙女も唄口明よほと、きす

青梅を見ても留るやのとかわき

天満宮 墨これは雨たれ落る硯かな

玉津嶋 わくら葉に歌書迄の詣かな

根上りや地に付ぬほと下り奈 (雑)

下り松 上る根を杖に持たせて下り奈

十六日ハ足を休め、雑談之内熊野詣の事聞合するに、此所ヨリ五十丁道六十里と承ニ憫して止ム。十七日ハ和歌祭とて、朝六ツ時より小田氏の家内同々にて和歌の浦へ出、棧敷を承、夕七ツ時迄の見物、古風を尽し見物限りなし。誠ニ前代未聞の見物也。(ネリ物、ホコ、諸士行レツ、長刀廻し、ホロ廻し、面かぶりいろく、ネココロ武士、力士、山フシ、社家、坊主、鬼踊、待ツキヲトリ、孫一ヲトリ、御舟廻し、巻物荷ない、女出立)

十八日若山を立て根ころ寺へ廻り、貝塚へ泊ル。此日の道十余里、但五十丁一里也。十九日大坂豊嶋や庄兵衛ヲ問。八ツ時也。雨天。右之庄兵衛より二朱くれ

尤さらさ此方より遣□。同夕夜舟約束、二人前増共ニ三百六十文、一人前百八十文也。彼は一朱入ル。廿日京都東ノ洞院魚の棚上キワ角ト松屋権兵衛殿宿。同日加茂葵祭。昼時より出行。但二条衣ノ棚小田清照君之近ニて加茂葵祭り見物、是又希代の風流なり。能見物也。廿一日両御本山參詣。廿一日東寺大師、

古物店。廿二日仕舞事。廿三日西本願寺江戸より御婦り、目覚し。其日小田氏へ行、荷物等頼。東山蒼虬尋、昼より立。草津泊り。六里半。廿四日立て坂の下泊り。十一里半。昼より大夕立大雷。坂ノ下宿かせや。廿五日桑名泊。五十丁道有て、ナラシ十三里。桑名宿コマ屋清兵衛。廿六日午下刻宮へ着。宮より名古屋一里半。此日而后会坐。尾連来合ス。初メ黄山ヲ問。武家也。書ヲ以出会。伊豫行脚岳(兵力)庫行脚三日前三着。則而后前三宿ス。此時江州行脚岳庫行脚伊ヨ行脚江戸行脚私共ニ五人、右ニ付中々兩吟も隙入之由故、帰りの役して、廿七廿八泊。廿九日三州岡崎卓池着。ハタコヤ行。卅日共ニ三人連、ナカネ山本スイキ

ン芍薬ニ遊。

閏四月朔日又岡崎へ帰、此所ニ相州大山コ山来合、翌日立。卓池、又故アリて二口他行故風交休ミ、朔日ニ帰り、二日ヨリ両吟初ル。八日コロモ堀六郎太夫様ヲ問。尤同所エキ者案内、巻歩三□。九日岡崎へ帰り、十日立、白スカニ泊ル。此日豊津イナリエ參。依十里ノ道十二里半也。クタフレ岡サキエ下。ウサ幻芝、エチコノ桐堂来ル。誠ニ卓池大ハンシヨナリ。十二日白スカより袋井泊。十一里半、武さしや三郎衛門。(欄外註記…クサツ宿ヲワリ屋、岡崎宿山川ヤハブン)(同…岡崎町たはこ□□□□) (以上K面) 舞坂と浜松の間ニ天龍川有り。大渡三三六文、其前ニ荒井御番所有、海渡五十四丁、八十文トル。十三日袋イヨリ岡べ泊り。嶋や。此日日坂佐与の中山觀音參。夜啼石。ワラヒ飯アメノモチ。大井川渡、貳百文トル。十四日吉原泊。宿不宜。ヲカベより十三里半。夜ニ入。今日川三ツ内一ツ舟也。岡部より二里来てマリコトロ、汁、安部川餅。サツタ峠、クラカワアワヒ、其前ニ鱈一皿。(欄外註記…駿河の国を通るとき、さる店にさも生々たる松魚の侍りける。さすがに古郷のさまも思はれて、こや一皿作りてんやと間に、心よくうけかいやかて作り与へぬ。腰かけなからあしわいけるうち、ふしくわい情しけれハ心又独情して、見た心人に見せたしふしの山)

十五日吉原を立て箱根権現へ參。山内ノ家火事。峠を越て、はたニ泊。但坂の口の家、同宿江戸の人松前の人メ四人、権現ニ參。十六日ハタを立て嶋立沢寄。大磯虎御前ノツカニ參り、藤沢ニ泊。翌朝湯行寺ニ參。江戸アザフ市兵衛町野口や安次郎、エチゴ岩船郡村上御城下はくろ町廻や長兵衛、清水や義左衛門。十七日四人連にて江の嶋へ參ル。誠に奇妙の絶景也。夫レより鎌倉廻、古跡限なし。鶴か岡ハマン參詣。其日ホドカヤ沢瀉や、上宿也。十八日三人にわかれ、岡延屋敷松山氏ニ着。(欄外註記…此間日の違有)

十九日三哲ヲ問。廿日風邪。廿三日青山行、史千同々。廿五日史千会出ル。廿七日浅艸行。廿八日再青山行。廿九日丁知行、両吟初。其日芝ニ返、心付。五月朔日柴又松行、芝より五里余。此所ニ尾州行脚弄化、下総行脚雨十来合。松伴男、番頭羽人惣メ三巻取掛ル。四日五日。六日江戸へ出、丁知両吟初。八日終。九日得蕪両吟、筑前祖郷、上野餘力惣吟初。抱義佛詣も取掛ル。十六日スミ、七八トクフ居。但十八日ハ素ボク。此人上野前池ノハタ松平出雲ノ守様中屋鋪、山田五左衛門ト云人也。十方石御家老ノ御隠居、上手也。此人彼抱儀迄御出、両吟初。同十九日右ソボク御屋敷へ上ル。扱十四五日ヨリ背ニ大ナル腫物出来、痛

甚た敷、サレトモ手葉にて通ス。十七日一日寝ル。是船中にて出来し同物也。十九日一宿。廿日満尾。此日未刻地震。尤十九日夕より大雨。廿日定念。廿一日丁知庵会、久蔵両吟。初夜五ツ時地震。廿二日同会。廿八日川開キ。此日舟にて王子参り、南枝振舞。客、得無祖郷流之餘力五木、其夜兩國花火見物、八ワタヤ遊。廿九日土用入、始終雨天。

六月二日迄も雨ふる。冷て袴布子かけ也。珍ら數年と云ぬ人なし。二日雨中二二里余の所、我爲に史千者来ル。三日曇天、ウナ菓フルマイ。七日同断。土用中大かた冷氣、雨多し。十五日ハ山王大祭、去ル御影堂にて見物。十六日ハ深川行、興多し。十七日ニ再度鳳朗へ行、両吟初。此老人病后、未た気分悪由なれ。執事農支世話して、一両日瀬浪ニアソフ。赤羽根新堀黒田ノ内、但秋マ岡本弥三郎。十八日。十九日夫ヨリ始終風交。

七月六日福芝会。此頃鳳朗病氣。深川マ蕉芭石墳并マ角參ル。七月十日クワンマノン。七月末より集ニ打たつ。其内青山往來、浅艸より凡三里。七月廿八日駝岳江戸着。

八月上旬堀六郎太夫様。八月月見、十四日ハ小柯、十五日ハ丁知。十三日ニハ駝岳始テ藏前ニ來。此日松の尾会。尤駝マ岳江戸着ハ七月十八日也。此間無俳同前也。八月十三日小柯会。十四日南枝、十五夜丁知、十六夜同、十七夜抱義、十八夜幌子。十九日鳳朗一泊。廿四日五日の頃、山外行、二夜一折。新宿りの先淀橋也。浅艸より凡四里。

九月十日フクシ会。此内方ハ俳事間なし。九月所々風交たへす。後の月丁知方也。十月十一日鳳朗はせを忌。十二日抱義同断。十一日出席して、歸りに大梅一宿。十二日同々抱儀へ出ル。

更十一月十二月至れとも風交止す、且集冊成就せず。故ニ越年、除夜ハ南枝。〔天保十年〕元日曇天。得無小鏡より屋しき、上田より松山一宿。二日山外行、少し雨ふる。両吟初。三日夜雪。四日雪。五日立、大梅居泊り。十二大雪ツム事二三尺、卓郎にて凌。時于集冊ニ掛、出立延引。漸廿九日ニ出來ル。

二月朔日肥後家月世話にて荷作、大坂松本与平主へ送ル。(二月一日〔駝〕岳テイハツ。)二月二日大安心、一日休。三日江戸を立て七里余、岩ツキマ鉤上村千外へ着。中村助二郎。尾州呂川來合、三吟三巻初。又四日、五日雪。九日立、筑婆山ノ方へ出ル。途中にて暮、サキフサ旅宿屋泊り。下妻風民を翌問。大木村名主梅圍着。崎フキヨリ五里。十四日梅圍を立、筑婆山へ登ル。其足にて真壁へ着。

十八日立テ字津の宮へ着。此間十一里。惣別大野にて奈須野にもツ、クト云。野々廻九十九里ト云。廿八日立テ日光へ着。鉢石町板屋九兵衛三嘯。廿九日夕社参、結句筆ニ尽かたし。其足にて又々を着、両吟二巻立。三月三日坊中未足え伝宿り。二月晦日両大師遷座。

三月二日日光権現祭礼ハ別野ト。三月二日にて雪少しフル。

社宮 うらゝかの限りや雪にさすひかり

此日日光権現祭礼、尤東照宮ノ祭ハ四月十六日也。是ハ日光居付ノ権現祭礼也。ネリ鉾有り。此日エンユウ坊ナト、行、明て出ヨリ帰ル。三月十一日中禪寺ニ登ル。権現大社脇ニ弥陀藥師觀音三象有、生へ披と云。猶奥院ノクサリ鉄ノはしこ有り。扱黒カミ山すさましく雪未た有。峠ニ湖水有。わたり一り、長サ三里ト云ウ。是より三里奥ニ温泉アリ。其外所々に有り。又流水雪の如し。又大滝アリ。是花巖か滝也。

見晴しやたちまち冷る春の汗

是ニ知機勤番也。其日同じ山を下る。十三日大日堂ニ遊。翁有青葉若葉。十四日より雨天。五日、六日雨。十七日立て在郷ニ宿ス。十八日本庄ハタコヤ泊。十九日上ツケ高崎西馬一宿。廿日同所泊。廿一日ウス井峠社人幸九泊。熊ノ権現マへ参ル。上り下り三り。此日信州八マン村葛古泊。西馬來合、双方両吟初。廿六日和田泊、ハタコ。廿七日和田峠五里八丁、此夜雨。廿八日スワへ着。大湖アリ。廿九日ハタコ。

四月朔日飯田城下(以上上面)近江屋三都良泊。四月朔日同因三り半南圭布ニ着。駒場マ宗園寺ト云。圭布両吟初。外、慮橋來、同初。二三日圭布差支有故ニ、くりや村九右衛門樗平を問。此内妻も好ナリ。歌仙三巻初。五日圭布ニ帰ル。橋來ル。六日。八日立、三り半南浪合一蹊イ泊。九日稻橋泊り、笑山両吟。

十一日六里南アスケ塞馬泊。十二日七里南岡崎山川や着。扱スワより六十余りか間、谷ツ、キ誠ニ陰氣の道也。サレト此一國好物のそは切多く、聊仕合タリ。十三日夕彼中根琴錦一泊。十四日宮へ出、雨天ながら桑名へ戻。船便。夜ルコギテ、十四日昼着。其日しやうの泊り。十五日七り半土山虚白泊、辰巳や宿。十七日三吟初、江戸天遊居合。十八日も雨也。近頃ハ始終雨天かち也。廿日昼立ケレハ又風雨也。石部泊り。廿一日京社鷲ニ着。廿三日伏見より舟、七ツ前八軒家着。廿四日。廿五日夜舟、再度京太老ニ着。始終雨天ナリ。此内へ三夜泊ル。伏見舟中にて渡部氏へ逢。廿九日夜舟にて再大坂へ出。此節梅室京へ居れとも、暑さハリ

故無俳。大坂釜魚招ニ応じ、此庵へ滞留。扱大坂俳諧大暑といへとも休なく、七月六日栄宝より下ル。同船、松木御家内小田両衆。同十八日入津。「以上M面①」

〈その一〉

〈その二〉

同年「天保十年」十一月十一日下行脚。十二月中旬帰庵。常太郎を召つれ出、都野崎へ預置。「以上M面②」

子「天保十一年」二月朔日ヨリ潮水連て豊後行脚。浦部道宮の浦泊。かまへ泊。三日府坂コウン着。其夜間違柏江寺ニ泊ル。翌日コウン酒場へ行。勘助ハ城下へ行。十一日城下へ出、潮水ハウメの方へ行。扱風交終、十六日立。大キに急、道を違、シケ岡へ出、庄やへ泊ル。十七日ヲノ、市へ着。早東風交。廿一日立。ヲカタ庄や井上勘之助巨井着。廿三日立テ乙津道松丘庄家安藤氏へ泊。廿四日乙津後藤今四郎碩田ニ着。此所ニ蘭窓遊客。

三月二日千歳御役所ヲ問。同日ミサヲ問、帰ル。三日昼より鶴崎兩人ヲ問、一宿。三月六日国元へ金入状を預置、立て府内町大坂や八右衛門楚玉ニ着。其夜兎遊旅行の首途として招かる。俳友六七人、各饒別句出ス。

とちへ行雁もしはしのわかれ哉

翌楚玉の楼に登り、青葉若葉今にも夏の来るかまへ。七日別府先湯宿ニ泊ル。九日夕浜アキ田ノ口庄舎招かる。十一日ニホリ田立石村庄舎月集「泊脱カ」リ。此所ホリ田湯元也。十三日再度田の口ニ行。但月集同々。十四日昼立、頭ナリを訪けるニ胡障故、又一里日出へ行、一宿。梓築三子を訪。此所ニ幻芝も来合。松屋寺蘇鉄境ニ増ル。八幡参詣、石の鳥居日本非類と覺ゆ。廿一日夜大雷ナリ。廿二日夕立て再度頭ナリニ出。尤此所より楠ノモリへ行へき心得の所、難所十里と云に困り、日田より可出と爰より田洪庄屋添書先ゆへ訪けるニ留主ニ付、同村半道跡戻り上ノ村虎丸へ一宿。廿四日高田植木角平不ニ彦着。廿六日同所鶴歩ニ招かる。廿九日立真玉ニ付。春城大喜ひ、先々奥へ通し物語けるに、此人日本一の多用人にて朝早く出て夜寝時帰ル。尤役場詰又ハ出役、右ニ付、歌仙取かゝり一日ニ一句二句誠に非類の退屈也。其うち中ツ画師来合、風交、外ニ一人風交、外ニ何にもなし。且フゼン大里ノ人夫婦娘連来ル。隣座敷也。「四月」廿一日漸出立、二リ程来、水先月居に付。風交終、廿五日立て乙女ニ来。

五月二日昼立て立浪月丘他行一宿。三日エラ西宝寺独笑泊ル。風交終、七日晴

天、住寺独笑共ニ三人、楠森へ行。州人他出故、先センカウ寺へ三人宿。明八日州人帰ル。風交。扱三嶋社見事。五月十二日立、平川郷屋霞城風交。十六日立、六リ、日田文鷲風交。五月廿日高嶋和戎着、風交。是より潮水を筑前ニ遣シ、廿八日の事ナリ、予ハクルメ蘭堂へ行。

「六月」十二日天氣故立テ柳川ニ泊。十三日高瀬ハタゴ。十四日ヒコ草月一宿。十五日南方村梅雪。廿二日熊本へ出、梅土庵風交。廿九日新町ハタゴ、チテ兩吟。

七月三日よりハシロ方かくへ行。六日柳亀付、風交。漸十日ニ潮水来ル。此間の世話云斗なし。十五日立、ウト着、宗雨着。十七日潮水共ニクマモトニ出。廿五日大ツへ出、廿六日サ、クラハタゴ。廿七日竹田、廿八日小野市。

此日「八月」七日立。此間大シテ長雨故、十日斗居。潮水ハ重岡ニヤリ、ワカレテ佐伯へ行。此日難義して初夜過ニ跨雲へ着。十三日潮水共ニ立、ウスキニ着。ハタゴ。十五日鶴崎。十六日サガノ関。舟ナシ。廿一日漸渡り舟。同夕ハワタハマ着。此所祭何かニテ無俳。廿三日潮水を大ズニやり、身ハ吉田へ行。廿四日雨、吉田ハタゴヤ逗留。時ニ句集評終。廿五日字和へ行。虚舟世話、緑苔兩吟。又町口伊勢屋へ遊、市橋も来ル。三日居、立テ、ウノ町一宿、ウワヨリ五里半。

「九月」三日大ツヲ過テウチノコ町泊ル。四日違ニテ山中に泊り、五日松山ニ出。十六日キリツツワカレ、二里東川上マセ川村非曲一宿。翌山越小奏照門問。同ヒミ卯角へ送ル。卯角遠方行故ニ二夜泊。楠木村女瓶ヨリ同日桜井油へ着。廿日也。廿二日江戸青阿来ル。各風交終。同放十、

「十月」六日立テ楠女瓶ニ泊り、一卷成りて、七日ヒミへ出。角兩吟、且照門兩吟、同ツマ同。十五日立、大町二夜泊。表平ニテ、十七日立テ柴人ニ逢。十八日奇丈ニ泊ル。廿二日立、常村小秀。廿三日雨。廿五日素柳。此内燕ニも来ル。

十一月朔日下柏其嵐に着。此所ニテ潮水ヘワカル。六日立、ワタハマ、今是潮水三吟。八日姫酒屋葛夫着。此所にて風交終、高松内油屋泊り。此内甚難あり。廿一日又候柏に出ル。廿五日小秀ニツク。

十二月七日小林燕ニ。十一日郷村桂玉。十二日大町泊。潮水ニ逢。十三日ヒミへ着。十四日照門より茶リンへ着。十六日楠一宿。十七日桜井油屋。

「天保十二年」正月廿五日ハシマ今治仕舞。閏「正月」四日桜井ニ帰リ、卯角居。十二日立テ照門ニ寄、病氣。同日ヒミ。十四日大町泊。翌日此所添書にて下□「青雅」ニ着。未仏来合。十六日桂玉。十八日柏村ヨリ御田巴曉へ付ク。廿二日常へ行。潮水居ル。廿九日立、柏へ来。二月二日姫へ行。同十八日再立、柏へ来ル。「以上M面③」

〔完〕